

『人文ムセイオン2025』実施報告

— トップダウンでもなく、マスプロでもなく —

竹中 幸史

(人文ムセイオン2025コーディネーター)

人文ムセイオンとは

人文ムセイオンとは、設定された共通テーマに即して人文学部の4人の教員がそれぞれの専門的見地から報告を行い、その後に参加者との質疑応答を行う、シンポジウム形式の授業である。この授業は2023年度、人文学部生に「人文学の神髄」を伝える、あるいはどの学生でも「人文学部でこれだけは学んだ」という経験を得てもらおう試みとして始まった。いわば学会の雰囲気を通じて彼らに学問や研究の楽しさを体感してもらおうのだが、同僚の研究内容や発想を知ることができるので聴講する教員にも人気が高い。さらにこの授業は一般市民にも開放され、地域に山口大学人文学部における学びを紹介している。くわえて日程は、10月末の土曜日、ホームカミングデーに設定されているが、これは久しぶりに母校を訪れた卒業生にあらためて学問の魅力に触れてほしいという願いが込められている。

かように人文ムセイオンは学会報告のように授業を行なうため、受講生には予習が欠かせない。そこで事前に彼らには修学支援システムを通じて各報告を理解するための資料が配布されている(授業4回分)。これに当日の聴講(4回)を併せ、受講生は計8回の授業を受けたとみなされて1単位を認定される。

午前と午後のそれぞれ2名の教員による報告の後15分の休憩に入るが、この間に受講生は修学支援システムを通じて(学外者は専用のアプリを通じて)、感想と質問のいずれか1つ以上を入力する。2度目および4度目の休憩の後にはディスカッションの時間がおよそ一時間取られており、ここで学生は入力した内容をもとに自由に質問をし、意見を述べることができる。一方、報告者はどのような質問にも応えることになっている。人文学のプロとしての姿、圧倒的力量を見せ、学生らを魅了することが期待されているわけだ。なおこのディスカッションには理学部教員2名がコメンテーターとして招かれており、文理融合の追求も図られている。

2025年3月、竹中の提案で今年度の共通テーマは「祈り」に決まった。報告を真木(日本史学)、谷部(民俗学)、稲垣(比較文学)、野坂(日本文学)の各先生に依頼したところ、快諾していただいた。6月には理学部からのコメンテーターが山中(環境生物学)、野崎(情報科学)両先生に決まった。「理系に祈りという分野はないので素朴な発想に基づく、自由な意見を述べるのでも良いか」と仰るお二人であったが、その自由な発想こそが学際知を起動させることは言うまでもない。是非にとお願いした。

広報活動

全ての人文学部生に人文学の神髄を教えよう。その思いで始まったムセイオンであるから、学生にひろくこの授業の意義を伝えることは重要である。それゆえ4月の1年生および2年生オリエンテーションにおいて、竹中が概要を説明した。特に1年生にはこの初回のプレゼンテーションが大事である。鉄は熱いうちに打つ。入学して間もない向学心の塊に、この授業をとらないで何しに人文学部に

来たのかと発破をかければ、彼らが息をのみ目を輝かせるのは当然である。

7月には、1年生向けの授業「基礎セミナー」の最終回（速水学部長担当）において、コーディネーターと発表者が登壇し、それぞれの専門とおよその報告内容を伝えた。ここでは1年生から教員に講義内容とは直接関係ない質問も寄せられ、彼らも気軽に応じていた。いわばムセイオンのためのアイスブレイクの時間であり、学生が接点の少なかった先生を身近に感じる機会となる。

夏休み明けのオリエンテーションでも再び説明を行ったが、3、4年生向けにはそうした機会がないため、人文学部内の掲示板にポスターを用いて告知した。徐々に期待が高まるよう、6月以降、報告者4名のテーマに沿った4枚のポスター（後醍醐天皇の肖像、尾張万歳、アムステルダムのプロテスタント教会の尖塔とイスタンブールのミナレット、長崎の平和祈念像）を作成し、月毎に1枚ずつ学部内に掲示することにした。10月以降はミレー『晩鐘』をあしらったA1サイズのポスターを人文学部研究棟のエレベータ前と集中講義用の掲示板に貼り出した。一般向けには人文学部ホームページのほか、『サンデー山口』に開催情報を載せ周知を図った。

これら広報は昨年以上に丁寧に行なった。というのも学生が人文ムセイオンを履修できるのは2回までで、昨年、一昨年と本授業を受講した者には単位取得のメリットがない。それゆえ3・4年生の受講生が減り、昨年までの賑わいが見られなくなることが懸念されていたのである。しかし、これは杞憂であった。人文学部生の学問への情熱は単位云々ではなかったのである。さらに受講登録の進捗中、2025年度山口大学ベストティーチング賞（2024年度実施分）に「人文ムセイオン2024（担当教員：竹中幸史）」が選出された。この事が追い風となって、結局、理学部生7名を含む375名が受講登録を行い、当日は400名超の人びとで会場はむせかえるほどの熱気に包まれたのである。

祈り—この普遍的なるもの—

当日のスケジュールは以下の通りである。若干の超過はあったとはいえ、およそこの通りに進んだ。当日の報告要旨は末尾に再掲してあるので、参照されたい。

開会の辞

学部長挨拶（8:50-8:55）

第1報告（8:55-9:35） 真木担当

コメント書き込み・休憩（9:35-9:50）

第2報告（9:50-10:30） 谷部担当

コメント書き込み・休憩（10:30-10:45）

ディスカッション（10:45-12:00）

（昼休み）

第4報告（13:00-13:40） 稲垣担当

コメント書き込み・休憩（13:40-13:55）

第4報告（13:55-14:35） 野坂担当

コメント書き込み・休憩（14:35-14:50）

ディスカッション（14:50-16:00）

総括（報告者・司会）（16:00-16:10）

アンケート記入（16:10-16:20）

閉会の辞

では第1報告から始めよう。真木は、第1回の人文ムセイオンから、この授業の可能性を高く評価し

ていた教員の1人である。実を言えば、共通テーマを「祈り」にすることを考え始めた2023年末（2年前）、候補者として真っ先に浮かんだのが真木、谷部、野坂の3氏であった。学生を愛し、このテーマに即した専門知を平明に語るができる面々だったからである。

真木が本報告で扱う後醍醐天皇¹は、鎌倉幕府を滅ぼす計画を立てた際に幕府を調伏、すなわち呪い滅ぼすための祈祷を行ったとされている。政治と宗教が密に関わる世界において調伏祈祷は敵を滅ぼす有効な手立てであったが、後醍醐天皇の場合、自らこれを行なったことが研究者の注目を集めてきた。まさに異形の王権である。ここで真木はこの帝による調伏祈祷に関する研究史を丹念に跡づけながら、史料に基づいて祈祷のあり方の変遷を整理し、中世社会の変動期における祈りについて再考を促してゆく。彼によれば、鎌倉時代後期には「密教授法」がブームと呼ばれたいくほどの様相を呈しており、後醍醐帝の父にあたる後宇多天皇も熱心に行っていた。それゆえ今日、後醍醐天皇を特に異形とすることには疑義も呈されているが、真木は彼の密教との関わりの深さ、実践の多さを指摘して、その特殊性をあらためて強調する。一次史料に基づいて中世仏教の連続性と断絶性を読解し、あわせて政治権力との関係を考察するという、いわば自家薬籠中の報告に思わず首肯する。我われにとって祈りによって（呪い）殺すというのは「非科学的」「非現実的」な手段に思え無価値なものとしてされているが、それではこの逆、祈りによって健康や平穏を希求する、愛の成就を望むのは非科学的、非現実的とされて打ち捨てられているだろうか。むしろ善行や微笑ましいことのように捉えられているのではないか。言外にこうした問題を突きつけ、21世紀の価値観を大きく揺さぶる真木の報告は、今日の戦争や抗争と対峙した私たちの態度を問うてもいる。のっけから祈りの多様な姿と意味の深遠さに戸惑う受講生たち。人文ムセイオン2025の先陣を切るのに相応しい報告だった。

第2報告には谷部が登場した²。谷部は、愛知県知多市で今も続く（復活した）尾張万歳^{おわりまんざい}なる民俗芸能に注目して、そこに潜む祈りを抽出する。万歳とは新春に太夫と才蔵が扇と鼓をもって家々を訪れ祝言を唱えて1年の幸福を祈る芸能のことであり、彼らはその対価に米や金銭を得ていた。歴史的には平安時代に遡り各地で伝承されてきた万歳は今日では多くが廃れてしまったのだが、尾張万歳は、高度経済成長期ごろまではそれなりに活動していたことがわかっており、現在でも保存会によって芸が継承されている。なお「まんざい」と聞けば、誰でも「漫才」のことを思い浮かべるが、そのルーツの1つとも言われているのがこの万歳である。谷部はかつての万歳のあり方を詞章のテキスト、画像あるいは動画で説明してゆく。これらを見れば、私たちが時折目にする、楽器を片手に話す「歌謡漫談」になるほどよく似ている。新春の漫才において「おめでとうございます」「今年もいい年にしたいですね」などと言うのは、今でも定番の口上である。しかし谷部はこれを単なる娯楽のルーツとして紹介したいのでは無論ない。彼は尾張万歳の痕跡を分布図で示しながら、愛知に移動してきた芸能者が被差別者であったことを強調する。そして万歳が本業だけでは食べてゆけない被差別者の副業として続いてきたこと、彼らを招く信者の注目を集めるために「笑い」が利用されたこと、そして今日の三曲万歳に宗教性は見られないことを指摘し、現代において笑いとは祈りは両立しうるのかと問題を提起したのだった。真木による問いと共鳴させながら、人びとの感性の変化に切りこんだ谷部。2人の報告は祈りが私たちの日常の時空間を貫いていることを示したのである。

2つの報告後、ディスカッションに移ったが、これは後にまとめて記すことにして、まずは午後の報告を聴いてみよう。

祈りは通じるか

第3報告を担当したのは、インテレクチュアル・ヒストリーを専門とする稲垣である。この報告に

関して、まず受講生の度肝を抜いたのは、彼が事前に配布した英語論文である³。その論文は専門的で、学部生には高いハードルである。こっそりAIに読ませた者もいたであろう。しかし論文と稲垣の報告の内容がテキストの「翻訳」を通じた知的接触のありようであるだけに、学生らはこうした手抜きを恥じ入ることになっただろう。案外、稲垣にはこうしたことも織り込み済みだったかもしれない。

ここで稲垣は近世オランダの東洋学者ゴリウスの宣教への関心に注目する。『アラビア語・ラテン語辞典』（1653）の編纂者である彼に関する研究は盛んだが、稲垣は、17世紀オランダにおける宣教活動、とりわけ聖書や信仰問答集の翻訳において、オスマン帝国出身のキリスト教徒が重要な役割を果たしたこと、またこれら翻訳を通じた、改革派教会の祈りをオスマン帝国へと広める宣教の実態を再構築しようとした。稲垣は緻密なテキスト分析に基づいてオランダ改革派教会信仰文書を解読してゆく。そこで示されるのはテキストの成立時期、翻訳者、翻訳の目的をめぐる先行研究への批判と新解釈である。特にこの翻訳の目的はムスリムへの布教ではなく、オスマン領内にいる東方キリスト教徒への布教にあったとする主張は大胆ながら、十分な説得力を持った。この翻訳（手稿史料）は実際には印刷も出版もされなかったため、いまだ多くの謎を残しているが、今後の調査で一層の解明が期待されよう。

最後は野坂の報告である⁴。これまでの3名の報告が過去、失われた時代の祈りを扱っていたのに対し、野坂のそれは戦後長崎における平和への祈りを取りあげていた。ここで野坂は永井隆「長崎での祈り」を紹介した。キリスト教徒である彼の「長崎で生き残ったのはわれらが罪人で、何かを果しえなかったからこの世に残されたのだ」というメッセージに聴衆は戸惑いを隠せない。敬虔な信者であるがゆえの認知的不協和、とさえ受け取った者もいる。さらには8月9日の式典会場における祈りが平和・鎮魂というイメージを想起させる一方、そのすぐ傍で現政府の姿勢を追及する声、あるいはこれへの反発など、様々な「ノイズ」が入り混じる現実を指摘する。私たちの知る「8月9日の長崎」はメディアを介して創られているのである。これは裏を返せば、多様な原爆体験、多様な祈り、多様な平和の思いがステレオタイプ化され、単一化される危うさを示している。長崎平和公園での慰霊・鎮魂行事さえ「記憶」の創造であって政治性を免れえないのであり、複雑な祈りを複雑なまま受け止めることがいかに難しいか。野坂は文学研究を通じて、穏やかに、かつ厳しい問いを投げかけたのだった。

ディスカッション

昨年同様、午前と午後2名の報告+ディスカッションが行われたが、今年度は、野崎の提案により、フロアと報告者の質疑応答を先に行い、次いで理学部教員2名のコメントと報告者のリプライに移った後に、再度フロアとの質疑応答を行うようにした。これは教員同士の議論を先に見せて学生たちを臆させることのないよう、より自由な発想に基づく質問の機会を大事にしたいと思ったからである。

その甲斐あって質疑応答は、昨年より活発なものになった。真木報告については、即位灌頂がないと正式の天皇としては認められないのか、後醍醐天皇像に投影された過去の天皇のイメージは何か、あるいは持明院統と足利義満の抗争はどう関わるのかなど、学生は自身の日本史の知識に基づいて鋭く切り込んでいた。ただ密教という宗教においてなぜ殺人や嘘が許容されるのか、密教は欲を肯定しているのになぜ流行らなかったのかという質問に対して、真木は末法の世であったこと、また宗教多文化の時代であったことを踏まえるようにと答え、歴史学研究がしばしば陥るアナクロニズムを批判していた。宗教のあり方は政治と文化の関係に左右されるのであり、今日の日本においても政治と宗

教の結びつきは切断されるどころか、特定の宗教団体が既存政党の有力な支援団体であることは言うまでもない。真木の報告と質疑応答は私たちの世界に「呪術」が満ちていることを改めて認識させたのである。

谷部報告については、生はげと尾張万歳の比較に話が及んだ時に、受講生の視野が広がったように思う。谷部は両者に直接的な関係はないものの宗教儀礼という共通性があり、また演者が「異界」からの使者であるという点でも共通していると述べた。万歳の演者らは乞食同然で被差別の対象であり、だからこそ祝福のときである祭りの折に彼らに施しを与える行為は徳を積む行為となった。谷部はそう繰り返したが、私はこの時「伊豆の踊子」や童話「ハーメルンの笛吹き男」を思い出していた。前者では旅芸人への差別が描写され、後者では楽師への差別が童話の背景になっている。しかし当時の民衆の住む世界においては、誰がいつ零落するかわからないのであり、旅芸人や楽師は恐れられ退けられながらも親しみと同情を寄せられる存在でもあった。新春には欠かせず待ち遠しくもあるが、普段は関わりたくない者たち。被差別民として生きながら同情される彼ら。音楽と差別と祈り。洋の東西を問わず、この三位一体が中世世界に現れ、現代に消えてゆく様子に何を読み取るべきだろうか。

後半の質疑応答に移ろう。稲垣の研究には、その研究手法に関する質問が多く寄せられた。コメンテーターの山中からは「探偵のようだ」と称されたが、稲垣は理学部生や教員を意識して科学史とインテレクチュアル・ヒストリーの近似性を指摘し、歴史学者の仕事を「探偵そのもの」と評した。また野崎がオスマン帝国におけるリテラシーを問題にして、テキストを用いた布教が企図されたこと自体、当時の識字率の高さを示しているのではないかと問うたのはさすがに鋭い。彼はまた人文学部生からの質問が多様であることに留意して、一義的でない答えを教える難しさについて尋ねた。これについて稲垣は「結論を良い意味であいまいにし、無理に急いで1つに求めないようにしています」と答え、こう付け加えた。「それが人文学の魅力でもあると思います。」

予想通り、野坂の報告には多くの質問、意見が寄せられた。広島平和記念式典においても一部の聴衆の政府批判あるいは排外主義的主張があるが、あのノイズも〈祈り〉と捉えるべきか、TVそのものが「虚構」ではないか。これに対し野坂は、広島についても同様の現象があらうし、メディアによる情報はすべて現実の「切り取り」であって長崎とさほどの差異はないだろうと、やはり穏やかに返してゆく。また学生の多くは、戦後の広島にあったカフェ「ピカドン」に驚き、そこに原爆被害の形骸化、記憶の風化を見ているようであった。しかし野坂は、広島の人びとには原爆被害への怒りと商業利用とが両立することに違和感がなかった事態にこそ注意を向けるべきと指摘する。確かに1970年代、広島カープの黄金期にその1番打者は「広島のコールド」と呼ばれていたし、それ以前には水爆打線を名乗るチームがあった。戦後すぐの広島では原子力の平和利用をうたう祭りが行われる傍ら、悲劇を想起させるとして原爆ドームの撤去が真剣に議論されていた。核をめぐる認識は容易に変わりうるのである。これは何も過去の話ではない。日本原水爆被害者団体協議会（被団協）がノーベル平和賞を受賞した翌年に、首相が非核三原則の見直しに言及する国に私たちは生きている。

また祈りという行為が極めて脆弱な効果、非現実的効果しか持っていないと認識している我々にとって、祈りとはある種の「諦め」の上に成り立つのではないか、神仏や超自然的な何かにすがるのは私たちが既に無力であるという認識の裏返しではないかという指摘もあった。これに首肯する向きも多かったように思う。ガザやウクライナでの戦争の終結を我われが一人ひとり願うとき、そう思うのも当然かもしれない。一方で、かの地の平和を祈る声に共感してメッセージを発すること、パレスチナ解放を求める市民の集会は諦念というより、希望の表明や異議申し立てと考えるべきだろう。況

して、ろうそくという宗教的なアイテムを持ち寄り、社会変革への祈りをこめた韓国の政治集会に諦めの気持ちはない。もしこの国において平和への祈りが諦めに、怒れる声が無力に感じられてしまうなら、それは私たちの社会がそう思わせている、あるいは祈りが個人化され、分断されている証と考えるべきではないだろうか。

おわりに

今回の4人の報告は、祈りという行為の本質を浮き彫りにするものだった。というのも、各々の報告は「祈祷の形式」「万歳による儀礼」「宣教のためのテキスト」「文学作品における記憶のポリティックス」を扱ったが、はからずもこれらは祈りの内容だけでなく、諸形態をも問題にしていたからである。このことは、祈りを安定的に継続させるには何らかの思いをただ祈るだけでは不十分で、その思念を支える何らかの形式や構造が不可欠であることを示唆している。しかし一方で祈りを支える「かたち」はただあればいいのではなく、時代・文化に合った何らかの集合心性に支えられていなければ永続できない。こうした「祈り」をめぐる心性と構造の相互補完関係⁵を捉えることが、今後の研究には欠かせないだろう。そして、これは今日の「宗教」だけでなく「ナショナリズム」「民主主義」あるいは「押し」文化など諸現象の理解に通じるはずである。

かくして人文ムセイオン2025は幕を閉じた。昨年同様の受講者数と活発な議論に鑑みれば、今年も成功といってよい。受講生の授業アンケートを見ても、他の学生の質問する様子や教員の回答に向学心を刺激されたという声が溢れている。学生は学びたがっており、彼らを学問へ誘うにはきっかけ1つ、舞台1つあればよいことを今年のムセイオンは改めて示したといえるだろう。

最後に、昨年11月、第255回山口大学部局長会議において、「人文ムセイオン2024」が2025年度山口大学ベストティーチング賞を受賞した際に、私が述べたスピーチを引用して、報告を終わろう。

420名もの参加者がいる授業となれば、どうしても教員から学生への知識のトップダウン、あるいはマスプロ的な内容にならざるを得ません。しかし人文ムセイオンは、教員と学生が、対等でフラットな関係において、共に新しい「知」を創ってゆく楽しさに満ちています。学生だけでなく教員からもそうした声が多くあがっているのです。この点に鑑みて、この度山口大学のベストティーチング賞を人文ムセイオンが受けたことは人文学部の姿勢が評価されたという意味で実に喜ばしく、また山口大学がトップダウンではなく、教員、職員、学生がステークホルダーの一員として共に知を創りあげる場であることを宣言した証でもあり、まことに嬉しく思います。今後も本学が民主的な学府であり続けるよう尽力する所存です。ご清聴ありがとうございました。

後醍醐天皇の倒幕構想と調伏祈祷

真木隆行

後醍醐天皇は、鎌倉幕府を滅ぼす計画を立て、幕府を「調伏（ちょうぶく）」、すなわち呪い滅ぼすための祈祷をおこなったとされる。こうした調伏祈祷については、密教の僧侶たちを動員して祈らせる方法ならば、実は珍しくない。モンゴル襲来に際しての異国降伏祈祷はもちろん、平安時代以来、承平天慶の乱、寺社の強訴、治承寿永の内乱、承久の乱などに際してもおこなわれた。政治と宗教が癒着していた中世においては、いわば王権の秘密兵器として、調伏祈祷の有効性が信じ込まれていたからである。

ところが、後醍醐天皇の調伏祈祷については、密教僧を動員するだけに留まらず、天皇みずからおこなったと推定できる史料も残されている。歴代天皇の中で非常に特異なケースとして注目されてきた。かつて網野善彦氏は、これを「異形の王権」と呼び、独自の視点でこの登場と衰退の歴史的意義を論じた。王権論、政教関係論、宗教史など、様々な観点から問い直す余地はまだ多く、素材的魅力は今なお色あせない。

近年、後醍醐天皇の倒幕構想については、通説的理解への懐疑が投げかけられたことを契機として再検討が進み、議論が精緻になりつつある。そこで本報告では、「祈り」という共通テーマのもとで、その軍事転用に関連する研究史の現状と今後の課題の一端について、お話ししたい。

いっぽう昨今の21世紀は、平時と戦時、軍事と非軍事との境界がボーダーレス化し、戦争観が大きく変容している。こうした知見も、20世紀的な先入観の克服の参考としながら、14世紀を捉え直す試みを模索してみたい。

新春に言祝ぐ一尾張万歳にみる祈り一

谷部真吾

本発表では、愛知県知多市に伝承されている尾張万歳を取り上げ、この民俗芸能にいかなる祈りがこめられているのか考察する。

万歳とは、正月に家々を訪れて祝言を唱え、代わりに米や金銭をいただく祝福芸能のことをいう。歴史的には、平安時代に見られた千秋（せんず）万歳（まんざい）の系譜を引くとされている。こうした万歳は、近世以降、各地で伝承されていたことが確認されており、特に名の通ったものに秋田万歳・会津万歳・三河万歳・尾張万歳・越前万歳・大和万歳・伊予万歳などがあった。これらの中には、すでに伝承が途絶えてしまったものもある。その一方で、尾張万歳は、現在でも保存会によって芸が継承されている。尾張万歳は1996年（平成8）12月に、国の重要無形民俗文化財に指定されており、いまでこそ舞台上で披露される芸能となったが、高度経済成長期ごろまでは、正月になると関西・中部・関東の家々を回り、技を披露した。万歳は、現在でも人気の大衆芸能である漫才のルーツの1つであるとされていることもあり、娯楽性の高い笑いを誘う芸のように思われるが、他方で、家々の繁栄を祝福する儀礼としての側面もあわせもつ。本発表では、そうした尾張万歳の特徴を指摘した上で、その「祭文（詞章）」に注目し、彼らの芸にいかなる祈りがこめられているのかを明らかにして

いきたい。

「祈り」を広めること—初期近代オランダの東洋学者たちとオスマン帝国における宣教—

稲垣健太郎

本報告では、オランダの東洋学者ヤコブス・ゴリウス (Jacobus Golius, 1596-1667) の多様な仕事のうち彼の宣教への関心に注目することで、初期近代ヨーロッパにおける祈りをめぐる問題を考える材料を提供する。

17世紀ヨーロッパにおける東洋学の中心地のひとつであったライデン大学のアラビア語教授を務めたゴリウスは、こんにち『アラビア語・ラテン語辞典 (Lexicon Arabico-Latinum)』(1653)の編纂者として記憶されている。さらに近年の研究は、ゴリウスがペルシア語やトルコ語で著されたイスラーム教徒の手になる著作をどのように読んでいたのかを明らかにしている。改革派教会 (Reformierte Kirche / de hervormde kerk) の一員としてのゴリウスがプロテスタント宣教に関心を寄せたという事実もまた、19世紀末以来の研究において指摘されている。しかし、宣教のためにいかなるテキストがどのように作成されたのか、という微視的な問いや、こうした宣教の目論見はどのような思想的・文化史的な文脈に位置付けられるのか、という巨視的な問いは十分に検討されていないように思われる。

本報告は次の二つの主張を展開する。第一に本報告は、17世紀オランダにおいて企図された宣教活動、とりわけ旧約・新約聖書や信仰問答集 (catechism) の翻訳において、オスマン帝国出身のキリスト教徒の協力者たちが重要な役割を果たしたことを主張する。ライデン大学図書館やアムステルダム大学図書館、バーゼル大学図書館は、ゴリウスや彼の周囲に集まった協力者たちの手になる手稿・写本を所蔵している。これらの史料群を分析することで本報告は、旧約・新約聖書や信仰問答集の翻訳を通じて、改革派教会の祈りをイスラームが多数派を占めるオスマン帝国へと広めるといふ、結果的には失敗に終わった営みの一部を再構築することを目指す。

第二に本報告は、オランダ共和国におけるオスマン帝国への宣教に注目することで、「祈り」の多層性を指摘する。ゴリウスと彼の協力者たちは、一方では改革派教会の「祈り」を広めるといふ、国家レベルでの計画に関与した一方、彼らがアラビア語で交わした書簡は、名宛人やその縁者の息災を祈るといふ個人的なレベルでの「祈り」の文言を含む。これらの私文書にも注意を払うことで、ゴリウスとオスマン帝国出身のキリスト教徒たちの知的協働や関係性について論じる。

原爆・核の表象と〈祈り〉

野坂昭雄

1945年8月に広島と長崎に投下された原子爆弾は、両都市に甚大な被害をもたらし、その結果、戦後には世界各地で原爆・核兵器の使用、実験等への反対運動が起こる。そうした運動は、しばしば「平和への祈り」といった形で〈祈り〉と結びつけられるが、本報告では原爆や核という厳密に物理科学的な問題が、なぜ〈祈り〉と接続するのかを、主に二つの観点から考えたい。一つは、科学的な認識と一般市民との間の懸隔という点である。現実的で科学的な認識と、〈祈り〉(=困難なことの実

現を願うこと)との隔たりは、おそらく東日本大震災後の福島第一原子力発電所の事故にも繋がる。もう一つは、原爆が文学や映画でどのように描かれてきたのかという点であり、これを黙示録的な終末のイメージの観念性という問題から考察したい。

¹ 真木隆行「後宇多天皇の密教受法」大阪大学文学部日本史研究室篇『古代中世の社会と国家』清文堂出版、1998年、478-498頁。

² 村上紀夫『まちかどの芸能史』解放出版社、2013年、16-63頁。

³ Nabil Matar, “The Synod of Dort in Arabic: Bodleian MS Marsh 268”, *The Seventeenth Century*, VOL. 39, NO. 5, pp. 719-730, 2024.

⁴ 西岡由香『八月九日のサンタクロース』凱風社、2010年。広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会『原爆災害 ヒロシマ・ナガサキ』岩波現代文庫、2005年。

⁵ マルク・ブロック、井上泰男・渡辺昌美訳『王の奇跡 王権の超自然的性格に関する研究 特にフランスとイギリスの場合』刀水書房、1998年。